校長室より

暗唱だより
令和５年５月
第三吾嬬小学校長
川中子　登志雄

（方丈のいおり）

４月が終わり、ゴールデンウイークに入りました。１年のうちで、一番過ごしやすい季節になりました。新しい年度を迎え、暗唱チャレンジも新たにスタートしましたが、今年度は私の出張が増えてしまった関係で、なかなか皆さんの暗唱を聞く時間が取れませんでした。せっかく来てくれたのに留守だったこともあったと思います。暗唱チャレンジは、月が変わってもいつでも受けることができますから、４月にできなかった人はまた来てください。

５月の暗唱は『方丈記』

令和元年度の復習課題です。今から８００年くらい前（１２１２年ころ）に書かれた「方丈記」は、清少納言の「枕草子」、兼好法師の「徒然草」と並んで、日本の三大随筆の一つとされています。（随筆とは、自分の考えや見聞きした事などをありのままに書いた文章の事です。）

書いたのは鴨長明（本当は「ながあきら」と読む）という、京都の下鴨神社の禰宜の子として生まれた人でした。長明は、音楽と和歌を愛しましたが、その人生は不運なことも多く、５０歳になる前に出家しました。鴨長明が終の棲家としたのが、方丈庵です。とても小さな庵で、一辺が一丈（約３メートル）の方形（＝ましかく）だったことから”方丈”と名付けました。この方丈庵で執筆したことが、「方丈記」の由来となっています。

長明の生きた鎌倉時代は、動乱の時代で、政治が不安定だっただけではなく、地震などの災害もたくさん起こりました。そのような不安に包まれた世界で、一人方丈のいおりにこもって書いたと言われる「方丈記」は、日本人の無常観を表した作品といわれています。

無常観とは、世の全てのものは常に移り変わり、いつまでも同じものは無いという思想の事です。今回暗唱課題にした、「方丈記」の冒頭は、その無常観を表す代表的な文章と言われています。

（参考：「日本大百科全書（ニッポニカ）」・「四季の美」https://shikinobi.com/houjouki）